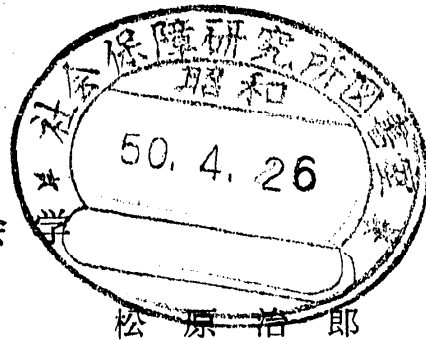


研究の窓

住民運動と社会学



最近の地域社会の動きは、「住民運動」という大衆エネルギーの組織的発現ということをはずして考えることはできない。社会学が取り組むべき重要テーマであることも、間違いない。ところが、これまで「住民」というタームそのものが、社会学の分析概念として範疇化されていなかったし、まして「住民運動」という大衆エネルギーの広範な展開について、その動きの法則性を説明する理論を、学問の世界がまだ持つにいたってはいない。

それでも、ここ数年、わずかながらではあるが、新聞・雑誌等に記載された住民運動を統計的に処理してその類型化や量的把握を試みたり、ケース・スタディを通して運動の展開過程をとらえ分析したり、運動参加者の態度や意識を調査したりするようになっている。ともかくいま、まず事実をより多く知ることが必要である。

山積する研究課題をざっと考えただけでも住民運動をどう性格づけるか……それがどのような基盤と条件のもとで成立し、どのような過程を経て強いエネルギーとなって発揮されるのか……そこでのリーダーシップの特質は……運動展開の過程で、参加者のうちにどのような態度や価値観の変容が生ずるのか……住民運動の発生が地方自治体をどのように変え、さらには地域社会の権力関係をはじめとする社会構造をどのように変動させるか……等々が挙げられる。

とくに発生そのものは偶然的だったり、その意味で原初的(オリジナル)であることが多いし、参加者自体も、これまで既成の組織活動とはあまり縁のなかった人々(主婦、老人、農民、自由業型インテリ層など)であるにもかかわらず、あらゆる運動手段を模索し、集合による物理的エネルギーの発揮を伴いながら、これまでの他の大衆運動(労働運動、農民運動、学生運動、市民運動など)にみられないほどの、異常なスピードで、参加者の知識・技術・態度・価値観の変容をもたらす。公害問題などへの技術的知識、法律的知識、運動戦術などを、驚くほど早く体得する。

考えてみると、住民運動は、労働運動などと違って、その展開を担保する既得の法律も協約もルールもない。したがって、ありとあらゆる可能性を模索しながら、要求を貫こうとする。もちろん具体的な戦術のモデルは、労働運動や政治運動、ときには学生運動に求めるが、住民運動の定式があるわけではない。しかも、それは、世のため人のためといった大義名分によってでなく、あくまでも自分たちの日常定住の生活からくる要求や不安の解消を前提にしている。まさにエゴイズムに立っている。

だが一方、住民運動のもうひとつの特徴は、それでいて組織化の基礎に「地域性」というものを置いている点で、地域的連帯といった情感、地域共属の認識、地域共通利害の追求などを結合媒体にしている。あまり恰好や体裁やイデオロギーの粉飾はない。

こうして住民運動は、今日の社会的状況のもとにおいて個別の生活者にとって「地域社会」とは何かをあらためて認識させているし、地域環境そのものを考える姿勢を強めている。また知識の高まりは、これまでの行政テクノクラートの優位性をつき崩し、行政への住民参加の可能性に道を拓きはじめている。さらに市民生活における情報の重要性、地域社会におけるフィードバック・システムの必要性を痛感させるにいたっている。

地方自治論、地域社会論、集合行動論、組織論、社会運動論、リーダーシップ論、生活福祉論など多くの学問分野にとっても、注目すべき対象であることは間違いない。